撰集抄における語り手西行

――その老年像と年齢について――

山口真琴

はじめに

繰り返すまでもなく、撰集抄は近世に至るまで西行自著として広く読み継がれてきた。しかも、一遍上人語録の記述等から、成立後まもない頃より自著説が流布していたと推定されている。このような撰集抄享受の歴史が自著説否定の論証を促し、その結果、西行自著としてはあるまじき誤謬が摘出され、更にはその仮托性さえも、西行実伝との照合や事実関係の検討を通して酷評されるに至る。恰も編者の無智無学が白日のもとに晒された感がある。

ところが、一遍上人語録にある「西行法師の撰集抄」をはたして西行の書いた撰集抄ととらねばならぬのか、と疑念を呈し、逆に成立当初より撰集抄の西行自著でないことは自明の理ではなかったかとする見解[1]が出され、加えて近時、中村幸彦氏の「擬作論[2]」では、撰集抄は西行偽書ではなく、当時の人が見れば著者が誰であるか判明するような逸興を弄した擬作であるとして、それを肯定してかかる立場の必要性が説かれる。いずれも傾聴すべきものと思われるが、確かに従来の「西行仮托」のとらえ方には十全さを欠く憾みがあった。その意味で、犬井善寿氏の編著者と述主（本稿では「語り手」と呼ぶ。）を明確に区別した上での『何某なる編著者が、この書の述主に西行という人物を造型し、述主西行に作中場面である逸話と語り場面である感想や意見を語らせているに過ぎない。編著者に関する「仮托」ではないのである。』という定義[3]は尊重されねばならない。作品構造の上に仮托性を定位させた氏は、作中時間提示語の使い分けをはじめとして、編著者の造型した作中事実には矛盾のないことを導いている。その成果は、換言すれば、撰集抄という作品世界における整合性を認めた点にあろう。本稿はその整合性に関わる語り手西行の老年像および年齢を問題として取り扱う。

一

西行実伝との照合の結果、最も甚しい錯誤として常に指摘されるのが語り手西行の年齢である。『過にしかた四十余年の霜をいたゞ』(序)[4]く語り手が『寿永二年むつき下のゆみはりに、讃州善通寺の方丈の庵にて』(跋)語り終える、という設定の理解は次に代表される。

…作者は寿永二年に四十余歳ということになる。西行の伝記には疑問の点もあるが、西行が四国に旅し、善通寺に庵を結んで滞在したのは、第七話にもみえるように、仁安(一一六六―一一六九・四九歳―五二歳)の頃であり、寿永二年(一一八三)には六六歳になるはずである。とすれば、西行自記としても、仮托としても有り得ないくい違いだといわねばならぬ。[5]

仮に、西行の実年齢や経歴を確認しなかったか無視したかの設定、即ちあくまで作品内事実として認めたとしても、なお破綻をきたしている。撰集抄では、語り手自身が『長承の末の年』に出家した事実を二度(巻六(3)、巻七(10))に亘って明言している。その年時を文字通り長承四年(一一三五)ととれば、寿永二年に四十余歳である語り手はその時まだ生まれていない。年次上致命的な設定ミスと言わざるを得ないのである。

但し、別な見方をもってこれを弁明することも一応可能ではある。例えば、序と跋との間に大幅な時間経過を想定した場合。だが、両者の間に時間的隔たりを感じさせる語り手像の変化は認められない。生死のながきねぶりいまださめやらで、夢にのみほだされつゝ、水の面の月をまことと思ひ、鏡の中のかげを、げにとふかく思ひ入て、あけくれは只安の心のみ打つゞきて、生死の舟をよそへずして、屠所の羊の歩みは、我身のほかにもてわすれ、鳥辺船岡のけぶりをよそに見て、過にしかた四十余年の霜をいたゞき、行末しらず、けふにしもやあらん。(序)

いかにもはげみて、むかしの五戒十善のよき種をうるほすべきに、たゞいたづらとして昨日もくれ、今日もたちて、羊のあゆみちかづき、生死速勧の、白髪をいたゞきぬる事のかなしさに……(跋)

共に、老境を迎えながらも迷妄脱し切れず無常な死に怯える自己を表明する。むしろ首尾一貫した語り手像を看て取るべきであろう。

また、後にも述べるが、こうした語り手像が各話の感想批評にも貫かれている点、序・跋の類似表現が作品内に散在する点などからして、序・跋が後に付加された可能性も極めて薄い。もはやこのような辻褄合わせも撤回しなければなるまい。やはり、西行の実年齢を確かめ得ず、長承から寿永までの年数を割り出せなかったための錯誤なのであろうか。

この序・跋における設定に対して、それを構想した編者側の事情あるいは意図を積極的に汲み取ろうとする努力も一方では行われている。谷口耕一氏は、撰集抄に使用されている年号・年次の精査に基づき、語り手が出家したという『長承の末の年』(付点稿者、以下同じ)および跋の『寿永二年』が、他の用例と同じくあくまで便

宜的に設定されたと導き、『過にしかた四十余年の霜をいたゞき』に関しても、撰集抄登場人物の年齢記述が四十〜六十歳に集中している事実から、これも編者の『西行仮托説話創作の際の常套手段であって、信頼すべき何かに基づく説とは到底思えない』と断ずる。(6) 編者の創作パターンによる便宜的な設定と見ることで、拙劣な錯誤への疑問も氷解されるように見えるが、はたしてそうであろうか。

二

確かに、撰集抄説話には登場人物とりわけ語り手が遭遇し交渉を持つ人物の年齢を、四十〜六十歳に画一化させようとした傾向が窺える。(7) その端的な証例が巻六(11)「武蔵野郁芳門院侍之事」である。語り手がかつて郁芳門院の侍であった遁世僧に出くわす本話は、発心集巻六(12)(8)および西行物語(9)所収話と類似関係にある。発心集において『年たけたるかれ声にて法華経をつゞり読む。』とだけある部分に対し、撰集抄では『としは五十ばかりにもやならんと見ゆるほどになり、花の机に法花経まきならべて「入於深山思惟仏道」と貴きてゐしてよめりけり。』と描かれ、具体的な年齢が施されている。一方、西行物語には『九十ゆうよなるらう僧』(文明本)『九十ゆふよと覚たる』(久保家本)とある。本話をめぐる発心集と撰集抄・西行物語との関係は、後者がいずれも前者を出典もしくは素材としたとする見方が強い。(10) 従って、老僧の年齢提示が後者において各々独自になされたと予想される。但し、西行物語の「九十有余歳」については、郁芳門院薨去の嘉保三年(一〇九六)から『六十余年』の経過を認めて時間的矛盾のないよう配慮されたとおぼしい。(11) だが、撰集抄にはそのような史実に対する顧慮は些かも見えず、しかも『五十ばかり』という年齢は一応『年たけたる』に適うものの、『…御経の力にや、虎狼もあやまたず。又、食物などは、時々、ゆゝしき天童の、雪のごとくに白き物をたびぬれば、食はざるさきに物のほしくもなくになむ」といへり。すでに仙に成にけるにや』といった自らの読誦仙人視とは合致しない。発心集が『花の色々をよすが』とし、花の『色に心をなぐさめつつ』日を送る遁世者を描くのに対して、撰集抄は『手づからもとゞり切りて』出家しひたすら法華三昧に明け暮れる、所謂西行好みの仏道実践者を造型しながら、その一方で四十〜六十歳という年齢枠に固執するのである。

この背景には、当然の如く四十〜六十歳を老境と捉える撰集抄の老年感覚があろう。四十歳代を老境に入れるのは、『人つゐに老おとろふる事有。…震旦の白居易は、四十六の形を鏡に移して、涙を落す。』(宝物集)(12)や『命長ければ辱多し。長くとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。』(徒然草)(13)などからさ程奇異ではないが、六十歳代を境に、殊に八十歳以上の老人が全く登場しないのは、発心集などとは異なり、撰集抄特有のものと言えよう。なお、撰集抄にはそれと相応するかの如き『八十の齢をたもつ物まれなり。』(巻六(10))という寿命感が存する。

先述したように、序の『過にしかた四十余年』を語り手の年齢と

見る谷口氏は、如上の年齢設定の傾向が語り手にも適用されたと指摘されるが、稿者はむしろ序の設定あるいは語り手の年齢が登場人物の年齢を画一化させたと考える。単なる言い換えではなく、四十～六十歳でなくてはならぬ必然性が語り手側にあると促える。その最大の根拠は、語られる説話の総てが語り手西行という個性に貫かれ、彼自身の問題意識がそこに色濃く投影されているという撰集抄の語りの構造そのものに求められよう。

そもそも、序・跋に示された語り手の嘆きは説話の感想批評にも繰り返し述べられている。たとえば次のようである。

悲しきわれらかな。心ひとつのしづまり得で、ひき結ぶみ山の草の庵にあととめかねて、たゞはかなき嬰子の遊びのごとくして、むなしくおほくの月日をすぎ行きて、老の波路にたゞよひ侍りて、渚によれば巖にくだかれて、己のみ生死の海にかへる事の心憂さよ。（巻三(7)）

いかなれば人は無常をさとり、いかなれば我空しく迷ふらん。いとけなきすら此理をさとるに、など年のみつもりて、頭は雪、眉は霜にまどふまでに成ぬれども、…（巻六(3)）

時に感傷過多と相俟って、その真実味までも削ぎ落としかねない表現ではあるが、主観的な感慨の中に語り手による自己凝視の姿勢が目論まれたことだけは容易に伝わる。[14] それらの内省を形成するものは凡愚観に他ならないが、それが常に「老境にあっての不毛な信仰」への嘆恨であるために、語り手の現状がより深刻化されている点に注目したい。こうした〈老〉の問題意識が支配的であることは、前掲の巻六(3)の感想によく表われている。それは『十三と云ける年の春の比』出家した林懐僧都の発心譚に対して述べられたもので、数少ない若年の出家者を描く話（他に巻四(6)）には同様の悔恨が見られる。おそらく、語り手のこの〈老〉の問題意識が四十～六十歳の老年の遁世者を多く登場させる契機になっているのであろう。そして、一様に清澄なる心境を獲得した姿で描かれる彼らと語り手との間には画然たる距離が用意され、その隔りが語り手に幾度となく悔恨を迫り、同時に、同じ老境にある彼らへの憧憬の念も強い実感と現実味とを帯びて語られるのである。たとえば、『さても、いま又いかなる浄土にかおはすらんと、かへすゞ〳〵うらやましく侍り。』（巻一(5)）『さてもいかなる所に、おもひすましてましますらん。かへすゞ〳〵床しく侍り。あはれ、この身をおもひすつる心の、いさかなりとも、つきねかし』（巻二(4)）『ことざまの、まことの道心者とぞ見え侍りし。山深く住みて、三世不可得の悟りを開いておはしけん心のうち、たとへなくぞ侍る。』（巻七(10)）といったように。

それが年齢をさすか否かは別にして、『過にしかた四十余年』は少なくとも語り手西行が老境にあることを示唆する。これをはじめとして、撰集抄における語り手の老年像が、説話の登場人物やその感想批評に深く関与していることをひとまず指摘してみた。

三

ここまで、序の『過にしかた四十余年』の解釈を保留し、語り手西行の年齢を不明にしたまま、その設定の意味について述べてきたのであるが、語り手の老年像ゆえにその憧憬対象となる人物達が四十～六十歳に画一化される点、語りの時間である寿永二年に彼が四十余歳であるのは一見妥当とも言える。しかし、冒頭に述べたように、この年齢でいくと実在西行とは二十歳余の差が生じ、その没年建久元年には語り手西行は五十歳前後でしかない。むろん、撰集抄成立時の十三世紀初めから中頃にかけては、既に入寂地をはじめとした西行誤伝（虚伝）が流布していたようであるから、このような実伝との齟齬はさして意味を持つまい。むしろ、同時期の西行伝説との対比を重視すべきであろう。たとえば、古今著聞集巻第十三では西行入寂の年を建久九年[15]とし、後の三国伝記巻六も同年東山双林寺で入寂したとする。また、西行伝説を一代記風に物語化した西行物語は大治二年以後まもなく二十五歳で出家、建久九年八十歳にて双林寺で入寂という説をとっている[16]。仮に、通説とおぼしき建久九年入寂説を撰集抄に当てはめると、享年は五十七、八歳となり、やはり西行物語とは大きく隔たる。但し、撰集抄における語り手西行の事蹟と西行物語のそれとの対応関係は注目され、詳しくは論じ得ないが、両者はかなりの部分で重なりを見せる。西行物語の描く出家から入寂までの諸国流浪の旅や高野隠棲などは、撰集抄の語り手も既に経験ずみである。西行一代記の大半を摂取している撰集抄にあって、語り手西行がいまだ四十余歳であるのは何としても若過ぎはしないか。殊に、語り手の老の不毛な信仰に対する嘆きは晩年にあることすら思わせるだけに、そのような疑念を払拭しきれない。

たとえば、撰集抄に多大な影響を及ぼしたと考えられる発心集の次の如き叙述に出くわすと、四十余歳の老の嘆きは些か不自然なものに感じられる。

十歳ばかりの時、譬へば春の若葉なり。二三十にて盛なりし時は、夏の梢かげしげりて、心地よげなりし比に似たり。今、六十にあまり、黒髪やや白く、しはたたみ、肌へ変り行く。即ち、秋の色づくにことならず。未だ嵐に散らずと云ふばかりなり。それ又、今日・明日の事なるべし。（巻三(9)「樵夫独覚の事」）

人の一生を四季の移ろいになぞらえた樵夫の言葉であるが、『今日・明日の事なるべし』は撰集抄序の『行末しらず、けふにしもやあらん』と相通うにもかかわらず、六十余歳が衰えゆく秋にたとえられている。これをもって語り手四十余歳説を否定するつもりは全くないが、発心集の老齢感覚からすれば、それは少しくはずれたものとできよう。

ついでに管見に及んだ例を掲げておく。

近比四十などにもあまりぬれば、老がよ、老らくなどのみよみあへる、なか〳〵片腹いたき事なり。……老が世などはいかさまにも、五十にあまりてのうへの事なり。……まして四十あまりなどを老らくといふ事最もゆゑなし。（八雲御抄巻三用意部）[17]

暁の寝覚めは老いの昔にて宵の間頼む夢も絶えにき

暁の寝覚めせられし事は、老いにも四、五十の昔の事也。今は宵にも寝られぬ也。（正徹物語）[18]

どちらも歌学書類からの引例で、参考程度に過ぎないが、四十余歳はあくまで老境の入口であり、実際に老境を慨嘆するには尚早であることが知られる。確かに、年齢を詠み込む和歌を概観すると、「四十」を老嘆の歌に見ることはほとんどなく、当然の如く「五十」「六十」以上が多い。

傍証ともなり得ぬ例を引きつつ、語り手四十余歳説に疑問を投げかけたが、さらに今一度撰集抄における語り手の老年像を検討して、その否定に向いたい。

まず取り上げるのは巻二(4)「花林院永玄僧正之事」。本話は、田上という山里に籠棲していた帥の大納言経信のもとに『よはひ六十にかたむきて、まみありさままことにかしこくやごとなき僧』が乞食に現われ、妻帯のため寺を追放されたと告白するが、その後、この乞食僧は名利栄達を嫌って出奔し各地を流浪していた花林院永玄僧正であったと判明する、という内容を持つ。例によって、語り手は『あはれ、この身をおもひすつる心の、いささかなりとも、つきねかし』と憧憬の念をあらわにするのであるが、同じ感想批評の中には次のような語り手自身に関する述懐も存する。

世をすつるとならば、かくこそあらまほしく、身の力もいたくかせ侍らざりし比、ひろく国々に経めぐりて、やむ事なき寺々おもしろきところ〴〵徘徊し侍りしが、さしあたりて身のうれひも忘られ侍りしかば、かくて一期をすごしたらむも、罪ふかゝらじと覚え侍りき。

諸国遍歴の旅、即ち撰集抄説話そのものに取り入れられている語り手の旅を、あくまで過去の事柄として語るこの部分に、作中時間と語り時間の明瞭な区分意識を確認し得る。そこで何より注意したいのは傍点部の『身の力いたくかせ侍らざりし比』という叙述。これは一方で、語り手が語り時間の現在において諸国を旅する程の体力を持たず、既に肉体的には衰えた情況にあることを物語る。語り手の永玄僧正に対する『六十にかたむき給ひぬれば、さやうの所を見いまそからんもかなはでや侍らん。』という感想は、〻うした語り手自身の現状からくる共感に支えられているとはいえまいか。同様に巻三(5)の生野の里に庵居する『六十ばかりに傾きたる僧』も、『山のために、寺焼かれ侍りしかば、なさけなくあぢきなくて、まかり出て、国々まどひありき侍りしほどに、いまは年もかたむきぬれば、此所にはなん住み侍り。』と述べている。従って、体力の衰えはもとより、諸国遍歴の後隠棲するあり様からしても、語り手の老年像は四十余歳などではなく、六十歳代にふさわしく造型されているのではないかと思われる。

今ひとつ触れておきたいのは巻三(8)「美濃国僧往生之事」。美濃国に『正直房』『直心房』などと呼ばれる不定住の僧がいて、『心やすきつぶね』として人に仕えて五年の後めでたく往生するが、そ

の姿を人々が写しとどめた、という話である。これを風聞した語り手は『あまりに貴く侍りしかば、かの国にまかりくだりて、うつしとめ奉る姿をも拝見し侍らんと思ひはじめて、すでに備前の細谷川まで出で侍りしかば、心地の悩ましくて、行くさきの道もいぶせく思ひやられて侍りしかば、それより思ひかへして、吉備津宮に』帰ったというのである。既に先学の御指摘[19]にもあるように、この美濃へ向う旅の起点は備前細谷川より西あるいは南に想定する他なく、おそらく跋に見える讃岐善通寺の草庵であろうと考えられる。語り場面の設定に合致する本話の語り手の行動は、明らかに語り時間にごく近い時のものと理解される。それだけに、語り手にとってかけがえのない「結縁」の機会を奪ってまで敢えて美濃行を断念させ、『いまは年のたけぬるぞかし、よく縁もうすく侍るにこそ』と語り手をして無念がらせた編者の意図は看過し得ず、やはり前述したような語り手の現状をより具体化するねらいがそこにあったと見たい。そして、他の老年者達と比較しても、こうした肉体的衰えを明確に打出す語り手像は四十余歳を念頭に置いてなされたとは言い難いのである。

四

まことに迂遠な道筋を経て本稿がようやく辿り着かんとするのは、序に言う『過にしかた四十余年』は年齢を指示するのではなく、ある時期からの経過時間をさすのではないかというごくありふれた結論である。一般に、直接それが年齢を意味しないのは当然であるが、その表現の基底には、ある銘記すべき時点からの時の経過を特立させようとする発想が認められよう。では、その時点とはいつか。それはやはり語り手の出家の年、つまり『長承の末の年』ではないかと考える。序冒頭の『生死のながきねぶりいまださめやらで…』は出家してもなお打続く迷いへの嘆きであろうし、

われらがなまじひに家を出でて、衣はそめぬれど、はかゞしき信心をもおこさず、み山に思ひすます事もなくて、年のいたづらにたけぬる、そゞろに悲しく侍り。（巻二(6)）

我はつたなしといへども、世をそむく事も彼局よりははるかのさき也。又すべて名利を思はず、ひとへに仏の道にとこそ思ひ侍れども、はや、かの局の心ばせにも劣り侍りぬるはづかしさよ（巻五(6)）

といった自省を促すものは、老境にあることとともに、既に出家遁世した身であるという自覚に根差した苦悩である。言うまでもなく、この苦悩の解決こそが語り手の語る行為における命題であり、その憧憬対象として多く四十～六十歳の心澄ました遁世者が取り上げられる所以でもある。彼らはまた語り手が冀望するところの語り手自身なのである。

ちなみに、語り手西行が出家以前の自身に関する事蹟を全く語らないわけではない。ただ、それらは『仙洞忠勤のむかしは、人によろづすぐれて…』（巻六(3)）の如く回想されるに過ぎず、決して説話

の作中場面に取り込められることはない。そればかりか、『かゝる事、在俗の時ならましかば、慢心も侍り、よろこぶ心もありなまし。いまはすべてこれらなにとも覚えねば、さすが仏法の力にこそ侍るらめと覚え侍り。』（巻五⒁）などには在俗時を出家以後と切り離して見ようとする意識が窺える。それはまた、『いはむや、妻子をふり捨てて、おもしろき所をも拝み、山々、寺々をも修行し侍るは、なか〳〵にたのもしくぞ侍るべき。』（巻六⑸）『あやしの我らにいたるまで、み山のすまひとて、なんとなく世にまじはり侍りしそのかみには似ず、心もすみて侍らば、まことの知識にこそと覚えて侍り。』（巻九⑶）に見える、出家後の境遇に対する自負と期待の思いにも連なる。何にもまして「真の境地を求め旅する西行」像を全身に負うている語り手が、出家からのそうした時の流れをもって『過にしかた四十余年の霜をいたゞき…』と述懐したとしても、さして不思議ではあるまい。特に、撰集抄と同じく西行伝説の時代に産出した西行物語にも、二十五歳の出家から八十歳入寂までの歳月が『にんにくの衣を染て西に行心をしびて、五十よ年を過ぬる夢、ねん〳〵せい〳〵花あひ似たり。』（文明本）『かくて五十余年をはせすぎし夢、…』（久保家本）などと回顧されることからも、その可能性は充分あると考える。

撰集抄では語り手西行の出家年齢が明示されないため、寿永二年時の年齢も確定し得ないが、西行の実際の出家年齢（二十三歳）や西行物語の二十五歳に従えば、語り手は六十代後半ということになる。これは既述したその老年像から予想される年齢と一致するだけでなく、西行の実年齢六十六歳に奇しくも符合する結果ともなる。長承の末から寿永二年までを『四十余年』とする点にもそれ程大きな矛盾はない。但し、そうした計算上の一致よりも、語り手自身が語り時間までに通過し、しかも現在もそうである老境年齢四十〜六十歳が、作中場面に登場する人物に付与された構図を看て取りたい。作中時間から既に理想の自己との「結縁」がなされていたと見たい。

以上、撰集抄における語り手像を追いつつ如上の臆説を提示するに至った。妄説でないことをひたすら願う。何やらからくりめいた『四十余年』の解釈であるが、これを出家後の経過時間と推定する理由は他にも求められそうである。なぜ『四十余年』なのか、という問題も含めて続稿を期したい。大方の御批正を乞うて、ひとまず筆を擱く。

注　1　青木晃「西行説話の基本構想―『撰集抄』から『西行物語』へ―」（国文学54、昭55・9）。

2　『今井源衛教授退官記念　文学論叢』（昭57・6）。

3　「昔・中比・近比と過ぎにし比など―『撰集抄』の述主と作中時間―」（説話四、昭47・12）。

4　撰集抄本文および説話番号は岩波文庫本に拠った。なお以下の引用本文は総て現行字体に統一した。

5　岩波文庫『撰集抄』（西尾光一校注）所収解説。

6 「撰集抄の構造—西行仮托説話の発想と傾向をめぐって—」（語文論叢八、昭55・9）。

7 語り手内在説話だけで一二例、その他も含めて二二例ほどにのぼる。

8 発心集の本文、説話題目は新潮日本古典集成本に拠った。

9 西行物語諸本文は『西行全集 久保田淳編』に拠った。

10 注6および講談社学術文庫『西行物語』（桑原博史全訳注、昭56・4）。

11 講談社学術文庫『西行物語』第三章にも指摘されている。

12 古典文庫『九冊本宝物集』に拠った。

13 日本古典文学大系本に拠った。

14 松下道夫「『撰集抄』の特質」（日本文学、昭49・7）に詳細な考察がある。

15 福田晃『軍記物語と民間伝承』は「九年」を「元年」の誤写と見る。

16 谷口耕一「西行物語の構想—虚像西行形成の構造について—」（語文論叢七、昭54・9）に詳細な検討が見られる。

17 本文は日本歌学大系第三巻に拠った。

18 日本古典文学大系『歌論集能楽論集』所収本文に拠った。

19 注6に同じ。

（高知大学講師）